

教育学部学生の小学校英語への不安調査と分析

木原 美樹子

Survey and analysis of the anxiety that undergraduate education students have about elementary school English

Minako Kihara

(2023年12月5日受理)

1. 研究の背景と目的

2011(平成23)年度に小学校高学年で学級担任が担当する外国語活動が必修化されて以降、小学校で英語を誰が教えるかについて議論されてきた。その後2020(令和2)年度より小学校高学年で外国語が教科化され、中学年で外国語活動が必修化された。第3学年以上で外国語(英語)教育が行われることとなり、担任を受け持つ小学校教員の3分の2が英語教育に携わることとなった。高学年外国語を担当する教員には、より高い英語力が必要とされている。そのため学級担任が英語の専門性を高めるとともに、専科教師の導入が進められている。文部科学省(2019)は「小学校における外国語教育の指導体制の充実」の中で、学級担任による指導と専科指導を両輪として活かすこと、専科加配の効果的活用と英語教育推進リーダーや中核教員を中心に校内研修や授業準備等の推進に取り組むことを掲げた。文部科学省(2022)「令和3年度公立小学校における英語教育実施状況調査」によれば¹、令和3年度は中学年で68.5%、高学年では50.8%の学級担任が、英語教育を主として担当している。それに対し専科教師等が主として担当した学級は、中学年で21.5%、高学年で29.5%となっている²。専科教師等の活用は進められているが人材が不足しており、多くの学級担任が英語教育を行っている。現在小学校教員を志す学生は外国語の授業を担当できる英語力と基本的な英語の指導力を、在学中に身につけておく必要がある。教育においては、教師が自信を持って教えることが大切であるが、小学校で英語を教えることに不安がある学生が多い(後掲図4参照)。本研究では、小学校教員を志望する学生の英語を教えることへの不安を分析する。

小学校教員の指導力を高め、不安を軽減するための教員研修のあり方に関する研究に、ベネッセ(2011)、大谷(2014)、町田・内田(2015)、米崎ら(2016)、俣野・

泉(2020)がある。俣野・泉は小学校英語教育に関する現職研修の現状と教員の意識を調査し、教員の授業不安の軽減を目指した校内研修プログラムの開発を試みている。その中で外国語授業の指導不安には、指導経験年数や英語力、海外滞在経験の有無、英語資格試験の取得状況が関連していることを指摘している。小学校教員の課題は、小学校教員を志す学生の指導においても考慮されるべきものである。学生にとって指導経験年数は別として、英語力の向上、海外経験、英語資格試験の取得は在学中に意識して取り組むことが可能である。

一方、小学校の教員を志す大学生の英語や外国語授業に対する意識や不安感を取り上げた研究として、松宮(2013)、物井(2013)、名畑目(2014)、福和・中津(2014)、津田(2022)、石森(2023)がある。津田(2022)と石森(2023)は、どちらも小学校外国語に関する授業の履修学生を対象に授業前後に実施した記述式アンケート調査を分析して、小学校外国語に対する不安を軽減するための方策について考察している。小学校教員を志望する学生を対象とした研究はまだ数が少なく、小学校教員を対象としたものに比べて小規模なものが多い。また研究対象とする学生の属性により、英語や小学校外国語授業に対する意識の違いが見られる。物井(2013)や福和・中津(2014)は英語科の学生が対象となっており、本学学生とは異なる性質が見られる。今後も様々な学生を対象とした研究データの積み上げが必要であると思われる。

本研究は、本学教育学部学生1年生が小学校教員として外国語授業を担当することへの現在の不安について調査し、学生への今後の望ましい指導のあり方について検討することを目的とする。

2. 調査方法

2023(令和5)年7月、筆者が担当する1年次開講の

英語教養科目を履修している教育学部学生に、Google Forms を使ったアンケートへの回答を依頼した。ここで考察の対象とするデータは小学校の教員になりたいと考えている76名の学生を含む123名のものである³。当該学生が小学校で受けた英語教育は、2011（平成23）年度より全面実施された前学習指導要領に基づくものであり、授業では文部科学省共通教材『Hi.friends!』が使用されていた。アンケートは（1）小学校で受けた外国語活動の経験（2）英語に対する自信と英語力（3）小学校で英語を教えることへの不安（4）卒業時到達目標について尋ねる質問からなる。当てはまる程度を尋ねる質問については、4段階か5段階で選択肢を作成した。具体的な考えや理由が必要とされる箇所では、自由記述を求めた。

上記アンケートに加え、当該学生が最終授業時に回答した、授業についてのアンケートの自由記述も、今後の英語教育を考える上で本研究の参考とする⁴。

3. 結果と考察

アンケート結果を上記（1）から順に取り上げる。（3）については、小学校教員を志す学生の回答結果のみを取り上げ考察する。

（1）小学校で受けた外国語活動の経験

「あなたが受けた小学校高学年の外国語活動で、主に授業を行っていた人は誰ですか」に対し、回答はALT（外国語指導助手）が52.8%、学級担任が31.7%、学級担任以外の日本人の先生が13.8%であった。ほとんどの回答者が小学校6年生であったのは2016（平成28）年である。文部科学省（2017）「平成28年度英語教育実施状況調査（小学校）の結果」によると、学級担任が主として外国語活動を担当している学級が93.0%、ALTを授業で活用する時数の割合62.4%であった。学生たちの小学校時代の記憶であり、学級担任とALTとのチーム・ティーチングであった場合に、ALTの印象が強く残っているとも考えられる。アンケート回答学生はほぼ1年次学生で、指導法や専門的事項の授業を受講した学生は含まれていない。自分が小学生の時に受けた授業での学級担任の姿は、学生が授業を考える上でのモデルになると考えられる。今後外国語の指導法等を学ぶ中で、学級担任としての自覚をもち、英語を教えるために必要な能力を習得すべきである。

外国語活動で「主にどのような活動をしましたか」という質問では、印象に残っている活動を選択肢から2つ選ぶよう指示したところ、ゲーム（69.1%）、英語の歌やチャンツ（61.0%）が多く選ばれた。これは次の質問

での回答「楽しかった」記憶につながるものと思われる。「外国語活動は楽しかったですか」に対して「とてもそう思う」が33.3%、「そう思う」が49.6%、と肯定的な回答が8割を超えており、否定的な回答は7.3%であった。また「外国語活動はその後の英語学習に役立ったと思いますか」という問いにも76.4%が肯定的な回答をしている。小学校での英語教育に好印象を持っている学生が多いことを示している。指導者として外国語の授業に取り組む際に、自らの「英語学習に役立った」という経験は、良い影響を与えるものと思われる。

（2）英語に対する自信と英語力

「あなたは英語が得意ですか」という問いについては4件法で回答を得た。結果は図1のとおりである。「やや苦手」「苦手」と答えた学生がそれぞれ39.8%、30.9%で計7割ほどとなっている。

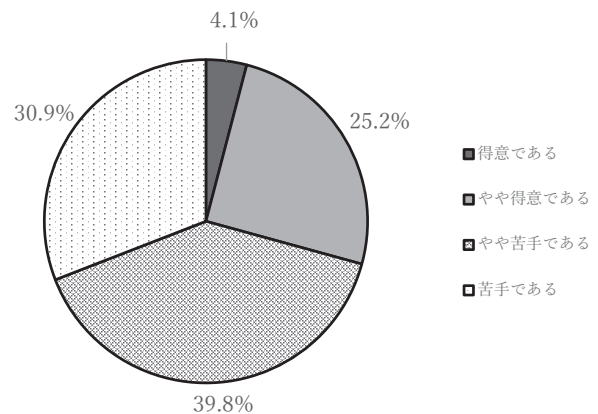


図1 英語に対する自信

英語を「苦手」「やや苦手」と回答した87名には英語を苦手と感じるようになった時期を尋ねた。英語を苦手と感じるようになった時期として、中学1年19.5%、中学2年24.1%、中学3年17.2%、高校1年26.4%という回答結果を得た。回答を基に学年ごとの苦手割合と増加率をそれぞれ棒グラフと折れ線グラフで示したものが図2である。苦手とする人が累積的に増加したと捉えられる。

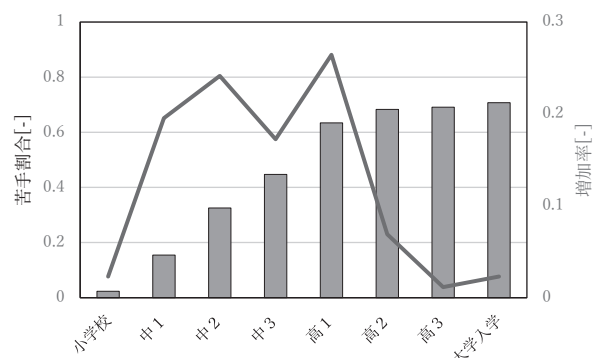


図2 学年ごとの苦手割合と増加率

中学1年生から高校1年生まで、学年ごとに苦手と感じる人が同様に増えている。中学3年までの段階ですでに苦手と感じるようになった割合が、全体(123名)の4割を超えている。苦手な理由(自由記述)としては、文法理解の困難さを上げている学生が最も多く、リスニングと長文読解の難しさ、単語や文法などを覚えることが苦手、といった理由が顕著であった。ここでは発音の難しさや話せないといったことは出てきていない。

次に実用英語技能検定(英検)の取得状況について尋ね、取得した一番高い級を選択してもらった。123名中約7割の88名が回答し、2級が24名、準2級が51名であった。「コア・カリキュラム」で示されている身に付けるべき英語力はCEFR B1レベルで、英検2級がそれに当たる⁵⁾。2級取得者は全体の2割に当たり、高校卒業までに取得した資格である。大学ではさらに上位の級を目指す指導を行う必要がある。準2級の学生はもう少し努力することで、2級が取得できる。3級及びまだ英検を受験していない学生には、準2級から受験させる必要がある。

公立小学校の「教員採用試験」では、自治体独自で英会話力を問う試験が実施されている⁶⁾。試験内容は日常会話や英語スピーチで、試験のレベルとして「準2級程度」と示されていることもある。英語実技試験を課している自治体には、受験者の取得英語資格によって、実技試験を免除しているところもある。また実技試験の実施有無に関わらず、どの自治体も受験者の取得英語資格に応じて、優遇措置を設定している。実技試験も優遇措置も、小学校教員としてどの程度の英語力が必要とされているかを示す指標となる。英語実技試験を受験する学生は、事前に過去の問題を調べ、試験対策を行う。英語を苦手とする学生も受験前に真剣に取り組んでおり、意義のある学習機会となっている⁷⁾。

表1は、英語に関する10項目の記述についての5段階(1:全くそう思わない, 2:そう思わない, 3:どちらとも言えない, 4:そう思う, 5:とてもそう思う)回答の結果を基に、1~5の数字をポイントとしてまとめたものである。

10項目の中で、英語の歌を聴くのが好きという項目の平均が極めて高くなっている。英語の歌を歌うのが好きという項目も比較的高い。英語の歌を教材として英語学習を行うことは有効であると思われる。「外国の人と友達になりたい」も平均値が高い。そうであれば海外に行って友達を作りたいと考えそうだが、海外での「語学研修やホームステイ」「海外留学」の値は、「外国の人と友達」に比べ高くない。木原(2017)では同じ質問に対し、それぞれM=3.55(SD=1.22), M=3.37(SD=1.28)という結果であったことから、7年前よりも大きく値が

表1 英語に関する意識

設問	M	SD
a. 英語が好きである。	2.99	1.04
b. 英語の歌を聴くのが好きである。	3.72	1.07
c. 英語の歌を歌うのが好きである。	3.02	1.02
d. 外国の人と友達になりたい。	3.61	1.06
e. 海外に語学研修やホームステイに行きたい。	2.85	1.24
f. 海外留学がしたい。	2.65	1.22
g. 英語を音読するのが好きである。	2.63	0.95
h. 英語を話すのが好きである。	2.63	0.98
i. 外国の人と英語で話すのが好きである。	2.78	1.00
j. 英語学習でペアの会話練習が好きである。	3.17	1.02

下がったと言える。

(3) 小学校で英語を教えることへの不安

小学校教員になりたいと考えていると答えた76名の学生の回答のみをデータとして取り上げる。ここで不安の程度を尋ねる質問の選択肢は「不安はない」「あまり不安はない」「不安である」「とても不安である」の4択とした。

「小学校の教科で教えることに不安がある科目を、特に不安があるものから4つ上げて下さい」という質問にする回答結果を基に、教科ごとの不安度の違いを示したのが図3である。ここでは「1番不安」= 8ポイント、「2番目に不安」= 4ポイント、「3番目に不安」= 2ポイント、「4番目に不安」= 1ポイントで数値化し各教科の不安度を表した。

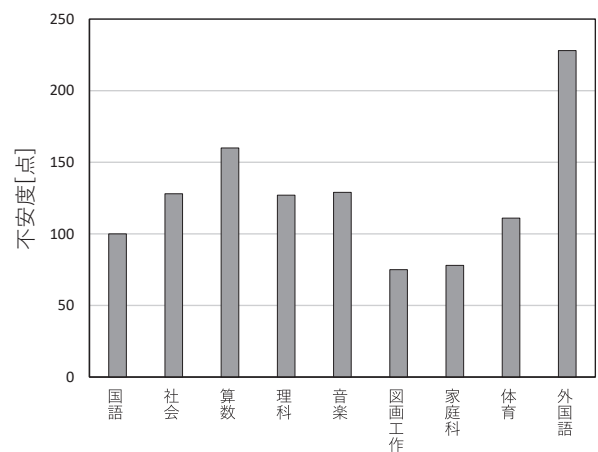


図3 教科ごとの不安度

教科の中で、外国語を教えることへの不安が顕著に高い。1番不安と答えた教科だけを見ても、外国語、算数の順に多かった。

次に「小学校で外国語(英語)を教えることに不安はありますか」と尋ねた結果が図4である。「とても不安である」18.4%(14名),「不安である」50.0%(38名),「あまり不安はない」27.6%(21名),「不安はない」3.9%(3名)

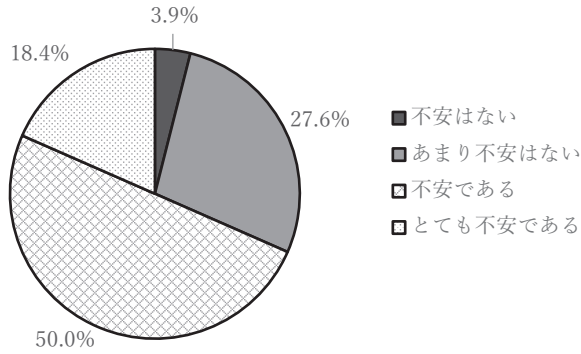


図4 英語を教えることへの不安

と回答している。不安であると回答した学生が68.4%(52名)となっている。

次に「小学校で外国語(英語)を教えることに関するあなたの不安について具体的に述べて下さい。不安がない人はその理由を書いて下さい」と自由記述を求めた。具体的な不安についての回答結果を分類すると以下のようになった。

発音に対する自信のなさ	30件
全般的英語力のなさ	20件
教え方がわからない	14件
文法がわからない	8件
未知の不安	3件
語彙力のなさ	2件

具体的な不安として、発音に対する自信のなさを上げていることに注目したい。「全般的英語力のなさ」を挙げた回答が20件あり、その中で「話す」力に言及しているものが6件見られた。「未知の不安」とは、「小学校で求められる英語の能力が分からない」「今の小学校の英語レベルがわからない」という不安である。「教え方がわからない」不安と同様、今後「コアカリキュラム」に基づく指導法の授業を受ける中で、軽減されるものである。それ以外の不安はすべて英語力に関する不安であり、不安を軽減するためには英語力を高める必要がある。

さらに「次の英語の力7つで、あなたが不安を感じているものを順に4つ選んで下さい」と指示し、7つの選択肢を上げた。語彙、発音、文法、聞く、話す、読む、書くである。回答結果は、図5である。選択肢から当てはまる順に4つを選択した、上記図3と同様「1番不安」= 8ポイント、「2番目に不安」= 4ポイント、「3番目に不安」= 2ポイント、「4番目に不安」= 1ポイントで数値化し、各英語の力の不安度を表した。

小学校教員や小学校教員を志す学生が不安を感じている英語の力として、先行研究に見られる発音への不安は

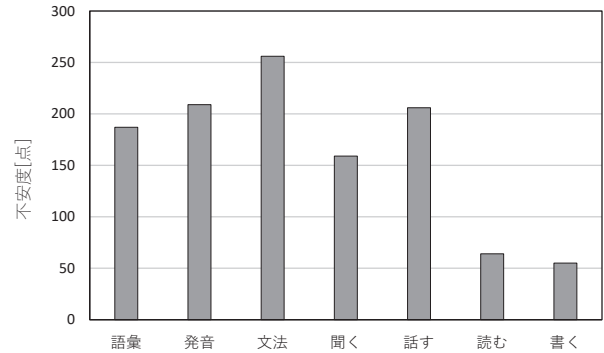


図5 不安を感じている英語の力

特筆すべきものである(松宮,2013;石森,2022)。今回は発音が不安という回答が予測されたが、実際は「文法」に対する不安が一番多かった。英語のコミュニケーション能力の向上が謳われ、話せることが大切という流れの中に、文法不要論がある。しかし学生は、小学生に英語を教える指導者として「文法」がしっかりしていないと自信をもって教えられないと感じているのである。「発音」「話す」の不安値も高いが、「文法」が不安とされていることに注意が必要である。

(4) 卒業時到達目標

「大学卒業までに、何ができるレベルまで英語力を上げたいと思いますか」という質問に対して、自由記述で回答を得た。回答には以下の特徴が見られた。多くの回答者が、英語でのコミュニケーション能力について言及していた。日常会話レベルの英語力を身に付け、外国人と英語でコミュニケーションがとれることをイメージしている学生が顕著であった。発音について言及しているものが10名であった。また客観的な英語能力の指標としての英語の資格試験、大学で受検を勧めている英検やTOEICの成績向上についての記述が見られた。その場合レベルとしては英検準1級(2名)、英検2級(4名)やTOEIC 600点(2名)、650点(5名)であった。また英語の映画を理解できる、英語の本が読めるなど、英語を学ぶことに楽しく取り組みたいという気持ちも表現されていた。

4. まとめと今後の課題

本研究では、本学教育学部学生が抱える小学校で英語を教えることへの不安について、アンケート調査とその分析を行った。アンケート回答者は、前学習指導要領の下で外国語活動を経験した学生である。授業を担当した学級担任やALTの姿は、学生が小学校での授業をイメージする際のモデルとなる。不安について具体的に書くこ

とを指示した質問に対し、「ALTの中には日本語を話せない先生もいたので、その時の担任は英語で会話していたが、自分にはそんな能力は無いため」不安であると回答している学生がいた。また、自分が小学生の時と現在の英語教育が変わっていることを認識しており「自分たちの時より、小学校の英語で教える内容が増えた」から不安であると述べているものもいた。学生の英語の指導力に関する不安は、まだ漠然としたものであるようで、具体的な不安を尋ねた場合の記述には英語力に関するものが多く見られた。

「英語に対する自信（英語が得意であるか苦手であるか）」(図1)についての結果から、小学校教員になりたいと考えている学生の回答のみを取り出し、「英語を教えることへの不安」(図4)との関連を捉えたものが表2である。表2は回答者の英語に対する自信と英語を教えることへの不安をクロス集計した結果を示しており、関連があることは明らかである⁸。

表2 英語の得意／苦手と不安のクロス集計

	不安はない	不安である	合計
得意	15	9	24
苦手	9	43	52
合計	24	52	76

この結果は、英語力に自信をつけることが、小学校で英語を教えることへの不安軽減につながることを示している。

3-(2)で英語が苦手とした学生の「苦手な理由」に、発音に触れた回答はなかった。発音問題には答えられても、発音記号を含め、英語の発音について体系的には教えられてこなかったのである。体系的な発音指導は、今後大学で行っていく必要があると思われる。英文法に加え、少しでも発音に自信をつけることが、苦手意識の軽減、英語力に対する自信につながると考えられる。

3-(3)で見たように、不安を感じている英語の力は、第1に文法、発音や話すこと、続いて語彙力であった。学生が教える立場で文法に不安を感じていることから、小学校で扱う英語表現を意識しながら、基本的な英文法を押さえる必要がある。

3-(2)で述べたように、今回の調査では、「海外に語学研修やホームステイに行きたい」「海外留学がしたい」という学生が7年前の調査時より平均でそれぞれ0.70ポイント、0.72ポイント下がっていた。このことへの対処が必要である。本学部では、2023(令和5)年度よりグローバル教員養成プログラムをスタートさせた。高い英語力と豊かな国際的素養を有する教員の育成を目指している。今後、学生たちが海外へ目を向け、様々な経験をしながら視野を広げることを勧める支援も大切であ

ると思われる。

本アンケート協力者が回答した、英語の教養科目についての授業アンケートには、「この授業の良かったところ、継続してほしいところをできるだけ具体的に教えてください」という自由記述欄が設けられていた。回答には、ペアによる会話練習の機会が多かったことを評価する記述が極めて多かった。授業で学んだ表現をペアで音読し、さらに英語で会話することで、スピーキング力がついたと感じているようであった。一般に学生はテストを嫌うものだが、毎時間単語テストや表現確認テストを行ったことも学習内容が定着し、理解がしやすかったと評価していた。英語を学びながら、英語の資格試験に挑戦し、結果を出すことができれば、さらに自信に繋がっていくと考えられる。

今後の課題として、今回の調査では得られなかった、文法と発音に対するより具体的な不安について、さらなる調査を行う必要がある。

註

1. 最新の調査は令和4年度のものであるが、英語担当者の状況調査に学級数の情報が含まれないため、学級担任が担当する割合が不明である。そのため令和3年度のデータを直近データとして取り上げている。
2. 令和2年度は調査が行われていない。文部科学省(2020)「令和元年度公立小学校における英語教育実施状況調査」において、学級担任が主として担当している学級の割合は70.5%であった。新学習指導要領全面実施前であるため、高学年の学級のみデータである。
3. 本学部学生は、取得を希望する免許により2年次から小学校コースと幼保コースに分かれる。取得可能な免許・資格の組み合わせには制限があるが、小学校、幼稚園、保育士、特別支援学校の免許・資格の中から1~3つを取得する。
4. この英語授業ではテキストとして、自習用e-learning教材が付属するものを使用し、授業時間外の学習に活用した。授業時は各ユニットの日常的なトピックに関連する表現を聞き取り、ペアで実際に音読や会話練習を行うことを中心とした。学生たちが高校までに学んできた英文法や英語表現を確認し、それを使って自己表現をすることを重視した。テキストとは別に毎授業時にTOEICの単語帳で指定した範囲から小テストを行うとともに、学期末に学内で実施するTOEIC IPテストの受験を課し、そのスコアも成績に組み込んだ。
5. 東京学芸大学(2017)『教員養成・研修 外国語(英語)コア・カリキュラム【ダイジェスト版】』において、小学校教員養成上「授業設計と指導技術の基本を身に付ける」とともに「小学校において外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準であるCEFR B1 レベルの英語力を身に付ける」ことの必

- 要性が掲げられている。
6. 2023年実施の教員採用試験で英会話／英語実技試験を課していた九州の自治体は、福岡県、佐賀県、大分県、宮崎県、鹿児島県であった。
7. 公立小学校教員採用試験受験者は、過去一定の期間に取得した英語資格によって、英語実技試験免除や優遇措置としての点数加点を受けることができる可能性がある。その場合の加点は準1級程度以上合格者に加点となっており、簡単ではないが、小学校教員として目指すべき英語力のレベルであり、英語学習のモチベーションを上げる良い仕組みである。
8. カイ二乗検定を行ったところ、有意差が得られた。
 カイ二乗値 $\chi^2=13.50$, P 値 $p=0.000238$
 また残差分析の結果、英語を得意とする人には英語を教えることに不安を感じていない人が多く、逆に苦手な人に不安を感じている人が多いことが示された。

- の育成」『日本教科教育学会誌』36(1), 55-64.
- 物井尚子 (2013) 「小学校外国語活動に対する英語科学生の意識調査」『千葉大学教育学部研究紀要』61, 9-14.
- 文部科学省 (2017) 「平成28年度英語教育実施状況調査(小学校)の結果」
- 文部科学省 (2019) 「小学校における外国語教育の指導体制について」『新学習指導要領全面実施に向けた 小学校外国語に関する取組について』(令和元年9月4日 教育課程部会 資料2)
- 文部科学省 (2020) 「令和元年度公立小学校における英語教育実施状況調査」
- 文部科学省 (2022) 「令和3年度公立小学校における英語教育実施状況調査」
- 米崎里・多良静也・佃由紀子 (2016) 「小学校外国語活動の教科化・低学年化に対する小学校教員の不安—その構造と変遷—」 *JES Journal* 16, 132-147.

参考文献・資料

- 石森広美 (2023) 「小学校外国語に対する学生のイメージと不安感」『北海道教育大学紀要(教育臨床研究編)』73(1・2), 21-34.
- 大谷みどり (2014) 「小学校外国語活動の「いま」と「これから」の課題：島根県教員へのアンケート調査結果をもとに」『島根大学教育学部紀要』48, 1-10.
- 木原美樹子 (2017) 「小学校教員を目指す学生の英語に関する意識と今後の課題」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』49, 78-83.
- 津田敦子 (2022) 「教員養成課程の学生の小学校英語に対する不安の分析」『琉球大学教育学部紀要』101, 119-129.
- 東京学芸大学 (2017) 『教員養成・研修 外国語(英語) コア・カリキュラム【ダイジェスト版】』
- 名畑目真吾 (2014) 「小学校教員を志望する大学生の英語活動に関する意識調査」 *JES Journal* 14, 131-146.
- 福和寛晴・中津植男 (2014) 「小学校教員を志望する大学生の小学校外国語活動に対する不安度の調査」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』63, 203-210.
- ベネッセ教育研究開発センター (2011) 『第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)報告書』ベネッセコーポレーション
- 俣野知里・泉恵美子 (2020) 「小学校外国語活動指導者の不安軽減につながる校内研修プログラムの開発」『英語教育研究』43, 77-96.
- 町田智久・内田浩樹 (2015) 「教師の外国語不安の軽減を目指した教員研修の開発」 *JES Journal* 15, 34-49.
- 松宮奈賀子 (2013) 「外国語活動指導への不安軽減策として教員養成課程に期待される「外国語活動指導のための英語力」